『２００１年未来基金』ワークショップ　第６班

未来の学校

発表者：屋久島情報教育研究会　岩井田充俊

①人的にも、制度的にもオープンな学校環境（但し責任をともなうオープン制が必要）

・　現在は、どちらかというと、全国で画一的な教育が展開されてきた。子供達が育つ環境はさまざまであるにも関わらず、どの地域でも、同じようなカリキュラムが組まれ、定められた目標のもとに計画が立てられ、実践されてきた。しかし、現在は、社会がめまぐるしく変化し、いままでにない様々な環境のもとで、人々は生活しなくてはならない。

・　社会の変化を受け入れ、様々な環境や考え方のなかで生活できる子供達を育てるには、今までのような画一的な目標やプランではなく、新しい発想による、新しい制度による、オープンな学校環境や社会が必要であろう。

・　与えられたものを、学校や教師がこなしていくのではなく、学校、教師が自らその子供達の置かれている環境を見据え、教育活動を企画し、目標やプランを立て、予算を申請し、そして結果を残す、そんなものも必要なのではないだろうか。これは、まさに未来基金の制度そのままである。

・今までは与えられたお金、プランのなかで、私達が動いてきたのだが、それでは発想がうまってこないというだけでなく、自分達が発想をしようという気持ちがなかなか湧いてこない。「発想をする」という姿勢をつくるためにも、オープンな学校環境が、必要であると考える。

②さまざまなシステムを維持するための人材

・学校の教育活動を効率よくスムーズに運営していくには、職員の明確な役割分担が必要ではないだろうか。

・例えば、情報教育においては、システムを管理していく専門知識・技術を持った人が必要。

・めまぐるしい、社会の変化・発展についていける子供達を育てて行くには、様々な専門性を持った人材を指導にあてる必要があるのではないだろうか。

③　日本中、世界中どこであっても平等に学習できる通信システムが必要

・離島は多くの自然に恵まれ、心の教育という意味では多くの利点を持っている。一方、情報の遅れや体験的な教育という意味では地理的なデメリットも大きい。有り難いこ

とに、屋久島は情報通信システムが整備されつつあり、本土の学校にもひけを取らない教育が展開され、グローバルな視点で子供が育ちつつある。しかし、日本の他の離島でまだまだ、地理的な条件の壁のために、遅れをとっている学校も多いのではないだろうか。

・情報通信システム（特にリアルタイムで映像や音声を伝えられるシステム）を充実させることにより、地理的な壁を取り払うことで、世界中どこででも活躍できる子どもが育っていくのではなかろうか。